



1983年(昭和58年)
8月号(No. 458)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

- 半世紀ぶりに玉山に登る……(1)
白神山地のブナ原生林……(2)
斎藤山登山記……(3)
深田久弥歿後十三年に想う……(3)
白神山地ブナ原生林の保全並びに
青秋林道建設反対の要望……(4)
集 会 (懇談・講演・映画)……(5)
白神山地のブナ原生林、屋久島の植物
フィールドマナー・ノート
ロードマン・ウィルソン博士を囲む会
昭和4年カシミールの旅
海外の山……(6)
牧野文子委員を想う……(7)
五百沢智也氏に秩父宮記念学術賞……(7)
東・西・南・北……(8)
北海道支部知床羅臼岳記念山行
山菜山行・守門岳登山
アンケート調査報告……(13)
お知らせ……(10)

▶日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜 10時～20時
水・金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせ電話 234六六五九

半世紀ぶりに玉山に登る

鈴木正俊

今から丁度四十五年前、昭和十三年の暮から十四年の正月にかけて、吾々が早大山岳部現役時代、十九名の隊員を玉山(当時の新高山)に送り、元旦新雪の頂上に立った。以後、三隊に分れ、主山から東山にかけての岩壁登攀隊、南玉山方面と秀姑巒山方面への二隊の縦走隊を出し、数々の登攀に成功した(山岳第三十四年第一号に掲載)。

それから年を経ること四十五星霜、当時の参加者も半減したが、今回もう一度尋ねて見たいなどの話が具体化し、結局五名が五月四日台北へ向った(隊長、関根吉郎、隊員、鈴木正俊、竹内孝、百瀬孝、港叶、いずれも本会会員)。

翌日早速、中華民国山岳協会へ入山挨拶に伺い、登路状況の詳細な説明を聞いた。本年は有史以来の多雪で、四月に入っても何回かの降雪があり、現在でも主山付近は相当の残雪があるとのこと、台

日五高齡山友重溫玉山舊夢

半世紀後登臨發覺山頭小多了
建議塔塔加以上不要過度開發

七、七時半山莊発、山は静寂そのもの、かすかに溪流の音は聞えるが、溪谷はあくまでも深く、山容はいかにも大きい。タータカ鞍部より、今日の目的地排雲山莊(三二五八m)までの道程はいかにも長い。人一人会うでもなし、静かな山路だが、平均年齢六十六

才という吾々隊員にとっては、中々の苦勞だ。

にわかに雷鳴、小一時間の夕立ちに遇い、ようやくにして排雲山莊に到着した。立派な山小屋だ。夕刻、二十数名の地元の登山者が西山へ行って来たと、ずぶ濡れで到着、急に賑やかになる。

八日、昨夜半は音を立てて降っていた雨も、朝方には止み、一面のガス、しかしこれも次第にうすれ、好転のきざしも見える。五時半出発、南峰への分岐点を過ぎると残雪も次第に多くなり、ちょうど真夏の北アルプスを想わせるような雪渓を、何回となくトラバース、直登。ここまで来てはじめて山岳協会で聞いた話が実現、雪の多いのにあらためて驚く。

高さを感じ、少々頭痛を覚える。最後の急な岩場を登り、主峰の肩、風口と呼ばれる地点に立つ頃は、四囲のガスもすっかり晴れ、北峰、西峰、東峰の全貌が現われた。八時五十分、主山(三九九七m)の頂に立つ。

半世紀ぶりに再び立った今、感激の一瞬である。昔登攀した主峰から東山への北壁、眼下に見える八通関からの登路、雪の北山、遥か雲上に浮ぶ秀姑巒山、一つ一つ往時を想い起させる景観である。頂上には、于有仁先生の三尺の銅像が大陸に向って立っている。

下山後、台湾の新聞「民生報」に、吾々の登頂の記事が「山不老人老、經過四十五年的光陰、又再度站上玉山之嶺、他們完成了一次感性的山之旅行」と書かれていたが、四十五年前に比べ頂上付近の山容の変化には一同いささか驚く。東山から主山への稜線、主山頂上付近はもっと丸みを持っていて、草付等が見られたが、今ではすっかりやせ尾根に変化している(この点、山岳協会の方も、二十年このかたすっかり変貌したと同意しておられた)。

名残りおしさを捨て、約四十分

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

で頂上を後にする。いつの間にか又もガスに包まれ、小雨さえ降ってきた。全く恵まれた頂上の四分であった。次第に雨足も激しくなり、雷鳴さえ聞える。ふり返れば厚い雲間に、今まで立っていた主峰の頭が見える。今日は一気に塔塔加鞍部まで下り、迎えのトラックで阿里山までの予定である。塔塔加鞍部までの道のりの長いこと、一昨日からよくこんな所を登ったものだ、一同無言で下る。すっかり日も暮れ、暗黒の悪

路を例のものすごいトラックで二

白神山地のブナ原生林

中村 あや

青森秋田県境の白神山地は殆ど

道がなく、鉈や鋸必携の奥深い山だという記事を読んで、心ひかれ思いをしてから十年程経つ。そこに今度青秋林道という、弘前と八森を結ぶ林道が作られることになって、日本山岳会秋田支部や青森の会員の間に反対運動が起り、自然保護委員会もこれに協力することになった。ランドサットの写真を見ると、白神山地ほど広域にブナ原生林の残る所は他になく、極めて貴重な自然の宝庫であることがわかる。

八月の議員団の視察には自然保護委員会も参加することになった

路を例のものすごいトラックで二
十一時、阿里山口に着、無事下山。翌日、台中經由、東西横貫をタロコ峡谷へ下り、花連より台北に帰着した。

最後に、この紙上で今回甚大な御世話になった中華民国山岳協会の皆様、また終始細部に亘り御面倒を見て頂いた国際聯絡組長、周文先生、また現地同行の稲門山岳会老岳友、登頂成功の労を取って下さった謝居萬先生に深甚の御礼を申し上げる次第である。

が、その頃はヤブが深く稜線を通ることは困難なので、林道予定の現地を見る目的で、残雪期に夫と私は出かけることにした。

四月二十九日八森駅で、弘前からわざわざ出て来られたJAC会員の根深氏と、弘前労山の成田、工藤、原子（はらご）の三氏に迎えられ、成田氏の車で雨は上ったが暗い空の下を二ツ森に向う。秋田側は長年に亘り、伐りつくされ、下部は杉林となっているが、高度八〇〇米辺りからブナの皆伐による裸地となり、昨年作られたばかりの初年度分青秋林道がのびていた。道路に雪が出て来たので車を降り、林道歩き、やがて笹の中につけられた登山道にはいり、しばらく進むと一面雪の見事なブナ林

となる。三村境に登ると正面はるかに岩木山が見え、目の下の赤石川源流は一望のブナ林であった。二ツ森頂上についた時は雨とガスで何も見えなかった。ここで弘前組は下山、御好意を謝して別れ、私達は鞍部に向かう。この先は全く道がないので、できるだけ残雪を拾って歩き、原生林の中にテントを張る。止むかと思つた雨はますます激しく、強風も加わってテントが飛ばされはしないかと思ひながら夜を明かした。

翌朝も雨だったが、キシネグラを過ぎる頃から明るくなつて来た。今年は雪だけが早く、ヤブの出ている所はネマガリタケ、ナナカマド、シヤクナゲ、ブナの幼樹等々が密生し、進むのはなかなか困難だ。雁森岳は南面が切れおちた瘦尾根でヤブが深く、うっかりすると、強い枝ではじきとばされそうな感じだ。頂上付近はマンサクの花盛りだった。気温は低く、一時は霰に見舞われた。このあたりは秋田側もブナ原生林がひろがって、人間の気配も感じられない原始境だ。しかしここにも林道を標示する赤印がつけられていた。こんな所に林道をつけたら斜面は崩壊し、冬は長期間利用できず、景観はめっちゃめっちゃになると思われ。青秋林道は延々とヤセた稜線に沿って進み、前方に大きく見える青鹿岳を越えて、弘前へぬける計画だという。気持のよい雪の斜

面を登ってトツチャカ岳に着く。その先のピークで二日目の泊り。翌日は晴、左に青鹿岳を見てコースを選びつつ小岳に向う。足にからまる灌木やネマガリタケと格闘しながら、小岳の肩に着く。荷物を置き、ハイマツを漕いで登るとヤブの中にピンクのイワナシの花に囲まれて小岳の三角点があった。空はすっかり晴れて北西に白神岳、そして二ツ森、雁森、トツチャカ、これから行く冷水岳、駒ケ岳が見わたせる。小岳の降り



中村 あや

原生林の中の明るい雪の斜面で、今通ったばかりと思われるカモシカの足跡が深く刻まれ、いきいきとした跳躍が目に見えるようだ。二ツ森で見たクマガラやカモシカ等、動物達のこの別天地が破壊されないことを願わずにはいられない。鞍部にテント。秋田側はもうここまで林道が入り、ブナはすっかり伐りはらわれていた。五月二日は、深いガスで冷水岳への尾根をとり違えたりしたが、途中から晴れ、背丈を越すネマガ

リタケをかき分けかき分け稜線に着く。ヤブの稜線を辿ると、左下の雪原に黒々と池が横たわり、やがてブナ林の雪の斜面に出る。腰をおろして、この美しい原生林をゆっくり味わった。冷水岳頂上は広々と雪原がひろがり、青空に大きく枝をひろげたダケカンパが陽に輝き、太いブナの間に岩木山が秀麗な姿をみせていた。元来た道を引返し林道を降る。植えられた杉苗は茶色く枯れ、斜面が崩れて道のあちこちが大岩や土砂でふさがれていた。フキノトウがいつぱい顔を出している道端にテントを張る。

翌朝、車道で偶々秋田支部の佐々木、打矢両会員に会い、青秋林道の問題について話を聞いた。その先で弘前から迎える根深、清野両会員の車に出会い、四人で駒ケ岳に向う。駒ケ岳のブナは一段と太く立派で、新緑はさぞ美しいことだろう。雪の照り返しに汗をかきながら馬の背を過ぎて頂上にくく。越えて来た山々、尾太（おつづ）岳、田代岳と豪華な眺めを楽しみながら、心づくしのお弁当を頂き帰途についた。山麓はまばゆいばかりの新緑だった。秘境白神山地の五日間は、大変楽しいものだったが、同時に、面として残されたこのブナ帯文化の故郷の地を、私共は是非後の世代に伝えなくてはならないと強く感じた。

斎藤山登山記

斎藤 健治

いつだったか、会員の高沢英雄君が高沢山に家族で登ったが、雨天で苦労したという話をされた。それで私も斎藤山があるなら登りたいものだと思つた。

コンサイス日本山名辞典が発行され、斎藤山が二つ載っていた。一つは南会津田島に在り、も一つは四国愛媛に在る。会津の斎藤山については、郡山山岳会著「南会津郡西部の山」の中に登山記録が載っている。「岳人」の本年四月号にも載っている。

早速親しい若い山仲間と話したところ、是非登りましようということになった。日航勤務の富田君もその一人。恐らく藪山だらうから、雪のあるうちがいいだろう。そこで、富田君の休暇が四月九日十日なので、その両日とする。時刻表を見ると大分不便なので、列車は止めて富田君の車で行くことにする。ところが前日になって、富田君が急にモスコへ飛ぶことになったので、私の車で行くことになった。

八日夜、内山城、中村久美子の両会員に拙宅まで来て貰い、九日午前二時私の運転で出発。日光、奥鬼怒を経て、山麓に着いたのが午前八時。林道を車が入るだけ

入り、天幕地を定め、岩魚釣りが一人バイクで来たので、登路をきくが駄目。そこへ松の下見に来た人に尋ねると、摺ヶ沢は雪が多くて駄目だから、ここから直登しなさいという。ありがたいたとばかり路のない松林を縫うて登る。尾根に出ると雪だ。だんだん雪が深くなる。広い鞍部で、コンロで紅茶を沸し、早食とする。天気は好く、風もなく温い。眠くなる。雪を掘ってここで三時間も眠ったらいだらうなという。

午後一時山頂に着く。三角点は雪の下で見えない。空は碧く、それこそ三六〇度の眺望をほしきまににする。二十万分之一の地図を拡げて、あれこれ山名を挙げては喜ぶ。特に二月に苦労して登った那須岳の勇姿には感激する。

地図上、この山頂よりやや高い無名峰が隣に見える。ではあれに登って命名しようということになり、雪庇を避けながら鞍部に下り、その頂上に向う。頂上には大きな三又の樫が蒼穹に向って聳え立っている。そこで祝詞をあげ、健治山と命名する。樫の前で写真を撮り、お神酒がないのが残念と後は大笑い。斎藤山より三〇米高

い。そこから尾根を一つ越えて、摺ヶ沢を目がけ、深い雪の中を駆け下りる。時には腰までもぐり、あ

わや骨折と思つたり、もんどりうって、三間も下に投げ出され、時に尻制動、と三人大いに奮闘して沢辺に着いたが、後は雪溶け水に沿つて下る。林道が川になり、橋の上の水が流れて二重橋ならぬ二重川になっているのには驚いた。落のとうを取りながら、天幕地に着いたのが五時。やや暗くなつた中を薪を拾ひ焚火をたき、持参

深田久弥歿後十三年に想う

富田 健一

本年三月は、元副会長深田久弥の歿後十三年目であつた。私は久振りに大聖寺を訪れ、旧友の墓に詣つた。北国の三月、白山はまだ真白であつたが、深田さんの眠る山裾の丘には、既に春のいぶきが感じられ、静かに彼と語りあうのは大層好都合であつた。

その夜帰りの車中で、改めて彼がJACに對し、又登山界に果たした役割とか、仕事について考えさせられたのである。

忙しい文筆稼業の裡に、ひまを作つて憧れのヒマラヤ(ジュガーヒマール)に出かけ、七、八年おいて、これまた探検史登山記録を調べているだけでは満足出来ない性格から、シルクロードにとび出した行つた彼。執筆と資料追求に一時間でも多くの時間の欲しかったことと思う。

の焼酎に顔が赤くなる頃には喉が重くなる。翌朝五時起床。 TENTを畳んで八時出発。帰路見た雪を冠つた七ツ岳はいい山だ。又来ましようとなり、帰宅したのが午後三時。都知事の選挙に間に会い、責任を果たす。これを以て斎藤山登山は無事終了。

それでも本会から理事を依頼され、次いで評議員に、引つづき多忙な副会長を頼まれた時、快よくそれを引受

けた。締切りに追われる仕事をいつも控えながら、可能な限り役員会に出席していたことは、月々届く「山」によつて承知していた、亡くなった三月の役員会にも出ていた。前には新ルール改裝委員会委員長や、図書委員会委員長も引受けていた。又国内の山だけでなく、世界の山を美しい文章で、登山家だけでなく、一般の人々にも興味をそそられるようリードして行ったことは、多くの人の認めるところ。

歿後とはいえ彼が集めた膨大な世界各国に及ぶ探検、登山関係の資料、図書が、国会図書館に引上げ子未亡人によつて寄贈されたことも、今後どれだけ我が国登山、探検、歴史を学ぶ人々に益することか、その恩恵は計り知れないものがあると思う。

ここで本会には名誉会員のいることを思い出すのである。私はおそまきながら名誉会員はいつ頃から推挙されたのだろうか、と会報を遡つてみた。創立三十年目に大平、ウエストン両氏が最初の名誉会員となられ、翌年小島、高野、高頭、武田、辻本、山川の六氏が推挙され、それ以後終戦までは途絶え、戦後二十年間に準創会会員及びその人々を支えて来た十七氏が推されてゐる。そのあと十七年間、即ち四十七年までに二十八人の名誉会員を持つことが出来、本会の充実した会員層を如実に見る思いがするのである。本会及び登山界に立派な功績を残された人々ばかりで、誠にお目出度いことと喜ぶたい。

唯ここに物故者故に、深田さんの名前を見ないことを非常に淋しく思うのである。こんなことを書く、と地下から余計なことを喋らんと、地下からお叱りがとんでくるかも知れない。しかしこのことは以前岩永信雄氏も会報上で問題提起しておられたことがあつた。物故者は推挙しないという不文律があるのかも知れないが、滅多にない現任副会長の登山中の急逝ということ、を、特別扱いにするわけにはゆかないものか。改めて検討願いたいと思ふのである。また会員諸兄姉からも、喜んでこの特別を認める声を、きかせてほしいと思う次第である。

次第である。

白神山地ブナ原生林 の保全 並びに 青秋林道建設反対 の要望

自然保護委員会

青森・秋田県境の白神山地には、全く人家も登山道もない一万六千ヘクタールに及ぶブナ原生林が残され、我が国で面状に残された原生林の最大級のものである。

この地域の中心部県境後線に、現在スーパール林道「青秋線」の建設が予定されている。秋田支部や青森県の会員の間に、この建設に反対し、ブナ原生林を残したいとの希望があるので、自然保護委員会では、これに協力して運動をすすめることになり、今回下記のような要望書を作り、関係各方面に発送することになった。

なお来る八月二十五日、二十七日には、自然保護議員連盟が環境保全と林道に反対の目的で現地に赴くので、自然保護委員会委員も、学術会議、日本生態系学会、日本自然保護連盟、日本野鳥の会等のメンバーと共に同行し、青森・秋田両県庁や青森・秋田両営林局に陳情を行なう他、白神山地二ツ森に登って、現地視察を行なう計画である。

(中村 純二)

要 望 書

殿

社団法人日本山岳会

会 長	佐 々 保 雄
常任評議員	中 村 純 二
自然保護委員会委員長	国 見 利 夫

白神山地ブナ原生林の保全と
広域基幹林道「青秋線」建設計画の中止について

我国ではブナ林が次々に伐採され、秋田県に於いては駒ヶ岳、太平山、森吉山等のブナ林の皆伐、青森県に於いては山麓地帯のブナ林の伐採等が行われて来た。しかし両県境にまたがる白神山地には、ランドサットの写真に示されているように、なお1万6千ヘクタールに及ぶブナを主体とする広葉落葉樹林が残され、その中には人家も全くなく、登山道も殆ど見られない。我国では面として残された原生林の最大級のものである。

この原生の大森林はその林相だけでなく、動植物相に於いても、その豊かさや稀少価値に於いて他に類がない。この地域にはニホンカモシカ、ツキノワグマをはじめ、イヌワシやクマゲラ、シノリガモが棲息し、またキタゴウウやサンリンソウをはじめとする北方山地性植物も豊かに育っていて、学術的にも貴重な存在である。さらに我国古来のブナ樹林帯文化を支えて来た歴史的な自然として、人々に豊かな水や山菜や魚など自然の幸を与え、人々を災害から守り、特色ある風土を作って来ており、今では地域住民の心の支えともなっている。

このような原生林が秘境として残って来たのは、白神山地が急峻な山で、容易に人の侵入を許さず、森林施業が殆ど行われて来なかったためである。しかし、このため一部周辺部は国定公園や県立自然公園に指定されているものの、大部分はその保全について全く対象外となっているのが現状である。私達は先ず第一に次の要請を行うものである。

- 1) 白神山地に残されたこの貴重なブナ原生林一帯が、原生状態のまま、広域に保全される措置の、一刻も早くとられること。

ところが、上述の要請に見られる地域において、最近青森県西目屋村と秋田県八森町を結ぶ広域基幹林道「青

秋線」の建設計画が建てられ、十分な調査もされないままに昭和57年度から工事が始められている。弘前と能代を結ぶ林道としては、既に西目屋村から南に下る尾太線も完成間近であって、2本の林道を通すこと自体あまり意味がないが、とりわけ、「青秋線」は秘境白神山地の中央を横切り、しかも全長28.1キロメートルの半分以上が県境後線を通過する点に大きい問題がある。

白神山地は、白神花こう岩と第三紀グリーンタフ層最下部の露出からできていて急傾斜が多く、いたる所に断層があり、岩石破砕帯や変成帯が見られる。これでは道路の開削により斜面崩壊が次々に起ることは必至である。また有数の多雪帯であって、たとえ開通したとしてもその利用期間は半年にも満たず、雪崩や土石崩壊による補修のため、莫大な費用も必要となるであろう。さらにこれまでの例からみても、ひとたび林道が開通すると、沿道の林の伐採が進行することは火を見るより明らかである。すなわち山は荒れ放題となり、水は汚染され、少しの雨で下流のダムや市町村は土石流の災害に見舞われるなど、治山治水上からも深刻な不安を住民に与えるに至る。これでは目的の一つである経済交流の円滑化など殆ど期待できないと思われる。山岳道路の末路は、台風10号による「南アルプス林道」の崩壊にみじくも示されている。私達は第二に次の要請を行うものである。

- 2) この際広域基幹林道「青秋線」の建設計画を即時中止し、この地域に残された我国最大のブナ原生林を、将来に亘って伐採しないこと。

貴職におかれても、この地域の特別な自然環境と、林道建設並びにブナ原生林の伐採に関する反対理由を諒とされ、格別の配慮をされるよう、ここに衷心より懇望する次第である。

昭和58年7月11日

会員懇談会

4月15日(金)
ルーム

(1)白神山地のブナ原生林

講師 工藤父母道委員
根深 誠会員

青森・秋田県境の白神山地にはブナ原生林が広く残っているが、最近ここに広域基幹林道「春秋線」の建設計画があり、秋田支部や青森の会員もその建設に反対し、自然保護委員会でもこれに協力している。この日は白神山地のブナ原生林を守る会の根深誠会員が青森から出て来て、スライドによって美しい白神の原生林や溪谷、滝、動植物を説明され、工藤委員からは、ツキノワグマ、イヌワシ、クマガイ、その他豊かな生態系やマタギの解説が行われた。

(2)屋久島の植物

講師 中村純二理事

屋久島のスギは、高度七〇〇から一四〇〇mまで、かなり広く分布しているが、上部の温暖帯では、低温と風衝のため萎縮矮小化が起こり、また立枯れ白骨化しているものも多い。下部の暖林帯で、ヤクスギと呼ばれるものは樹令千年以上で、幹にコブや波打があり、樹皮は白色に近い。一方コクスギと呼ばれるものは、樹令三百年以下で、樹令が中間のスギが見当たらないのは、コブなどのある割り難い不良杉を残して、江戸時代

に島津藩が皆伐を行なったためである。

縄文杉は、世界で最も樹令の大きいスギで七千二百年といわれ、これらの保存については、外国でも関心がもたれている。現在巨杉が保護されている地域は、学術参考林、白谷雲水峡、ヤクスギランドの約一千ヘクタールに過ぎないが、私どもはその保護面積を増大するよう努力してゆきたい。屋久島の四季の自然のスライド、8ミリの映写も行なわれた。

(出席者) 佐々保雄、平井拓雄、中村純二、根深誠、工藤父母道、高遠宏、麦倉啓、池田剛、松本恒広、斎藤冬喜、平戸孝夫、石橋正美、関塚貞亨、坂本正智、大峰芳枝、佐藤勉、小林碧、薬科光雄、片桐理一郎、中村あや、国見利夫、武田満子、中川博樹(自然保護委員会・総務委員会)

会員懇談会

6月15日(水)
ルーム

「フィールドマナー・ノート」について

話題提供 中村純二委員
最初に日本の美しい自然のスライドが映写され、これらの自然を美しく保つためのフィールドマナー・ノートである旨の説明があり、内容について活発な検討に入った。

C4 煙草をくわえながら歩かな



C6 奥又白池や剣三ノ窓の冬山

残置ゴミが大変目立つ。
E3 軟質の紙を使用する。

付3 ルートであっても、グルーブの道しるべなどやたらにつけない。
付5 特に年長者を優先にする。
付9 必ず協力する。

等が議論された。他に山上にある山小屋の汚物処理法、殆ど人の入らない沢で、流水を集めての焚火などは許されるが、多くの人間の入る場所では、腐るゴミの埋込みも不可、さらに騒音に対する配慮の必要性などが取り上げられた。

(出席者) 高遠宏、中村純二、遠藤光男、関塚貞亨、麦倉啓、大峰芳枝、国見利夫、渡辺正臣、宇津力雄、伊藤美恵子、柴田篤志、梨羽時春、中保、松田雄一、川上光久、中村あや、斎藤から、荒野康子、中島孚、小林碧、関口周也、千葉保之、広羽清、斎藤直信、沼倉寛二郎、小林由美子、宮前淑子、原謙一、岩堀瑞子、内山城、中村久美子、古川竹也、市川義輝、寺田和子、宮地佳枝、折井健一、福井正吉(自然保護委員会・総務委員会)

ロードマン・ウイルソン博士を囲む会

日本登山医学研究会の招きで来日したロードマン・ウイルソン博士を囲む会が、医療委員会と集会委員会の肝煎りで五月三十日、十九時からルームで開かれた。

ウイルソン博士は、アンカレッジの環境健康保全局(日本の保健所に相当)の局長で、登山医学に造詣が深いということで、高所医学の泰斗チャールズ・S・ハウストン博士推薦の人である。

五月二十八日、二十九日の両日、信州大学で開催された第三回日本登山医学研究会で特別講演された後、上高地に向い、山研で一夜泊、大森薫雄会員、堀井昌子会員にエスコートされてルームに到着した。

講演は、赤松医療担当理事の司会で、マツキンリー峰およびフオレーカー峰登山中の死亡例についてと題して行われた。

マツキンリー峰登山の歴史は、一九〇三年に始まり、一九八二年までの八十年間に、マツキンリーおよびフオレーカー峰を目指した登山者は、世界各国から計六〇九〇人に達しているが、死亡例は五〇名であり、死亡率は〇・八%であって、ヒマラヤにおける死亡率より遥かに低率であると述べた。死亡の原因は、滑落二十名、雪

崩十三名、凍死十一名、急性高山病六名であり、日本人の死亡者は十七名で13を占め、原因は、滑落五名、雪崩八名、凍死一名、急性高山病三名であった由である。

次に、急性高山病は身体の細胞の低酸素状態の総合であって、人により消化器症状、肺症状、神経症状と症状の現れ方が様々であると説き、なかでも肺水腫と脳浮腫が危険であることを、死亡例のレントゲン写真などをスライドで示しながら説明し、急性高山病の治療は高所では難しく、たとえ数百メートルでもよいから速かに低所へ移すことが最も大切であると結んだ。このことは特に耳新しいことではないが、登山者は常に心にとめておくべきことであろう。その後は、アラスカでの登山一般に関する質問に応ずるなど、PRにも熱心な一面をみせていた。

講演終了後は、集会委員会のお世話になる料理を賞味しながら、和やかに懇談した。博士は、父上が宣教師として来日しており、五才まで日本に住んでいたためか、日本の食べものはなんでも食べてやろう式にトライしていたし、浅間温泉では大浴場に一緒に入り、浴衣を着て正座するなど、飾らない親しみやすい人柄の人であった。佐々会長が折悪しく御旅行中であつたため、赤松理事が会のペナントを贈呈して謝意を表し、会を終えた。(長尾 俤夫)

講演と映画の会

6月25日(土) ルーム

フィルム委員会

昭和四年カシミールの旅

クル溪谷からロータン峠

講師 三田幸夫氏

三田さんは、昭和二年からカルカッタの貿易会社に勤めておられ、四年に、ヒマラヤに麓でもよいかから行ってみたいと、一ヶ月の休暇をとってカシミールに旅行された。その時に三田さん自身が撮影された映画が、いろいろな想い出話を添えて上映された。

「シエル」族の山案内人を紹介されたが、一カ月分の費用が払えないので断った。

「マナリという村から、一三〇〇三田氏から佐々会長に寄贈される貴重なフィルム(撮影・広羽清)」



○フィートのロータン峠へ行き、そこからリアスリッジという一五〇〇フィートの山に登る計画をたてたが、暴風のためロータン峠で追いかえされた」などなど。

とくに興味深かったのは、16ミリ撮影機を手に入れた話。

当時インド政府は富クジを発行していたが、賞金が高いので外国からも買い注文があったほど。ある時三田さんの会社の上役が、中国人に頼まれて富クジを買ったら、三等(賞金三〇〇万円くらい)に当たった。その中国人はお札に割を上役に返し、上役はそれでシネコダックという当時最新のカメラを買った。そして三田さんの旅行の話を聞いて、貸してくれたという。

「カメラをいじるのは初めてだった。カシミールへ行く汽車の中で、英文の仕様書を読んで使い方を研究した。その中に『ハンターが鉄砲で獲物をねらうようにすればよい』とあり、わかった気がした。それで撮影したのが、今日お見せるフィルムだ」

映画は16ミリ、22分、モノクロ、サイレント。初めての撮影とは思えないほど見事なカメラワークで、町や村や山の情景がうつし出されていた。ところどころに入る字幕が右書きで、時代を感じさせる。雪中の登山風景、大吹雪の有様など迫力ある映像から、村の祭り、青空入浴などののんびりした

海外の山

プレの成果

片山全平

一九八三年プレ・シーズンのネパールヒマラヤでは、際立った登山活動が見られなかったなかで、昨冬、冬季エベレスト単独登頂を果して逝った加藤保男の日記騒動が、浮き彫りにされたかたちだった。一体加藤の日記そのものが存在していたのか(発見されていたのか、といった方が正確だが)、極めて疑わしい。あの場合、小林利明とのアタックパーティは「加藤」がチームの代名詞となり、実際に存在していた小林の日記は、シエルパ間では「加藤の日記」と、すりかえられて公表されたとも考えられる。小林の日記が一万ルピーで取引されたが(驚きである)、勘定高い面もあるシエルパのあいだで、法外な値踏みから、幻の日記」を捏造したとも考えられる。いずれにせよ、人騒がせな終幕だった。

前々号で、今シーズンの目玉となったメスナーのチョー・オユー南西壁初登は紹介しておいたが、このほか、日本の十隊のうち、六月中旬現在で、ブッシュ山の会(山本久子隊長ら六人)の婦人たちのツクチェ登頂、また東京のティマンクチョール山の会(山野康光ら四人)のアンナプルナ4峰の登頂がある。外国隊ではメスナーのイタリア隊のほか、米西独合同隊(ゲルハルト・レンサー隊長

ら二十人)のエベレスト、フランス隊(アンリ・シガイレ隊長ら十五人)のジャスナー南西稜ルート、ポーランド隊(ボショイイチ・シマンスキーら十二人)のダウラギリ主峰(北面から)の各登頂が主なもので、二十三隊中九隊の成功率であった。

このなかで、加藤日記の発見は米西独隊によるが、同隊の第一次登頂はラリー・ネルソンら米隊員四人とシエルパ一人、第二次は米二隊員とシエルパ一人の計八人。しかし、ディック・バス(五三)、フランク・ウェールズ(五一)は、エベレスト登頂者最高齢記録をねらったが、いずれも失敗した。これまでの記録は、一九七九年ポストに果したゲルハルト・シュマツツの五十歳と四カ月。

中国関係では、チリ隊(十六人)が北東稜經由の、また米国隊(ロバート・グレイ隊長)が、新ルートからそれぞれチョモランマを狙ったが、多量の降雪は登頂断念を余儀なくさせた。フランス隊はこの秋、中国側からネパールへのチョモランマ縦走を計画しているという情報もあり、この入山についてはミッテラン外交の一つの成果か。中国隊はナイブン(七〇四三メートル)の初登頂。明年はその姉妹峰のナムチャバルワに三十五人のメンバーで初登頂を狙う。同峰は従来の高さより六メートル高い七七六二メートルに修正されたことが、中国科学院学術調査隊から発表された。これは航空測量によるもので、地殻構造運動の結果か、インド測量の誤差か。

ナンガパルバットに、日本人による初登頂を富山県岳連が果した。

場面まで入っており、興味深く見られた。

映写後しばし三田さんを囲んでの懇談会があり、最後にフィルムが三田さんから佐々会長の手に贈呈されて、会は終了した。このフィルムは、今後フィルム委員会の手で大切に保管される。

(出席者) 三田幸夫、小原勝郎、

去る六月九日の文子様の告別式は、地味で純粹で、彼女の遺徳がしのばれるお別れでありました。

五月初めから、神経痛とリユーマチで、すぐそばの東大分院で治療をうけておられました。が、なかなかかはばかしくなく、五月末には食物は喉を通らず、わずかに点滴で栄養をとられていました。六月初めまで痛みを訴えておられ、その後急に痛みが止み、その代り動脈から大出血し、太股に紫斑が出て病状は悪化しました。非常に珍しい病状であり、担当医から、回復の見込みはないと告げられたその翌日、六月八日の夜半に御主人の看護の許で昇天されたのであります。腎不全、腸管出血が死因とされています。

文子様は明治三十七年一月に生まれ、神戸女学院を卒業されました。昭和四年に四子吉氏と結婚されましたので、ダイヤマ

追悼

織内信彦、島田翼、小室雅夫、堂本暁子、金坂一郎、田口二郎、山口節子、高沢英雄、藤方勝、松下肇、山崎安治、伊藤忠男、榎田晴美、山本良三、村木秀男、平野隆司、佐々保雄、菅野弘章、広羽清、沼倉寛二郎、神崎忠男、中村純二、内藤俊夫、松家晋(内藤 俊夫)

ンド婚を、二年前早目に祝われたのは、真にお幸せであったと思います。

彼女とイタリー語は、やはり御主人四子吉氏の影響が深くかかっているようで、最初のきつかけは、御主人のイタリーオペラ好きに刺激されたとお話を伺いました。昭和十年頃日本研究のため京都にいられたスタミジュリーさんの面倒を見ようになり、京大の浜田



牧野文子委員を想う

佐藤 テル

総長にたのまれ、文子様の日本語と交換でイタリー語を学ばれました。彼女が三十二、三歳の頃でありました。その後北大から京大に移られたマライニー氏から本格的なイタリー語と、そして元々お好きな山歩きなどを、御一緒にたのしまれるようになられたようであります。

彼女と山、彼女がどんな経路で

会員・五百沢智也氏

秩父宮記念学術賞を受賞

本会会員・宇都宮大学講師、五百沢智也氏は、氏の多年にわたる山岳学の研究「日本アルプスおよびヒマラヤ山脈における氷河地形

山をたのしまれるようになったのか、私どもは生前にゆっくり伺う機会もなくお別れをし、残念に思っております。

分には發揮されたと言われております。外に彼女の翻訳によつて、原作よりも光彩を放つたものもあると聞いております。

文子様の御実家は、六甲山ハイキング・コースの苦楽園にあり、学生時代より六甲山や仁川溪谷を御自分の庭のように歩いておられました。特にマライニー氏とのイタリー文学を通しての交りは、さらに山へ山へと導かれ、御一緒に

最愛の伴侶を失われ、八十才を超えられた四子吉氏におめにかかるのは、私にとつて心が痛む想いでありましたが、文子様が、海外委員会に寄せられました御厚意と御協力に対し、色々とお話し合うこともお慰めになるかと考えて、目白台のお宅を訪問しました。その時、文子様の原稿でまだ完結されてないもの、或は既に出版元も決まっている三篇など、ご主人では全然どうしてよいかわからぬ数々の草稿を拝見し、改めて文子様の情熱に感動を覚えました。

彼女のイタリー語は既に定評がありますので、ここで細かく説明する必要はありません。文子様は「山」ばかりでなく、その文学的才能は、カルゴールドーニ氏の「主人二人の召使」などにも表れており、これが舞台で演じられた時、初めて文子様の実力が充

じであります。

秩父宮記念学術賞は、登山および山岳の研究に顕著な業績のあった個人またはグループに授けられるもので、昭和三十八年に創設された。昭和四十七年、本会の一七〇年日本エベレスト登山隊の業績に対して、第八回秩父宮記念学術賞が授けられたほか、本会の会員やそのグループで、この賞を受けた人は多い。今回の受賞も、ひとり五百沢氏の榮譽であるばかりでなく、本会にとつても大変光栄なことであり、その受賞をお祝したい。



東・西
南・北

北海道支部十五周年記念 知床羅臼岳登山

会報「山」二月号(四五二号)で、知床羅臼岳山行を、ヒマラヤ山行で準備も整わぬまま掲載したところ、全国各地より希望者が殺到し、「山」五月号(四五五号)では、定員締切りのお知らせを出す始末。

北海道支部では、準備の委員会を数回重ねながら、手拭の染上げ、会報「スプリ」の印刷を推進して五月十四日の支部総会、五月二十二日より、今西錦司元会長の北海道の山六つ、そして五月二十八日は、東北北海道支部親睦山行金華山と、席の暖まるどころか、知床の準備も止まる程であった。

七月二日(土)、札幌を午前八時過ぎ出発、参加者は、CL大山君の家族を含め八十名である。臨時バスガイド水科さんの名調子に乗り、新札幌を経て国道12号線を北上、旭川で給油と昼食が重なり、後のバスの方々には、一時間程食事を遅らせる始末になった。39号線は、石北峠、美幌、斜里と順調

に、二台のバスは一路、宇登呂を目指す。オシンコシンの滝を過ぎる頃、オホーツクの夕焼け大日没を、バスの車窓より展望できる快事となる。何が好運をもたらすか判らない。七時十五分宇登呂到着。二軒の分宿とするが、今夜は静かに就寝と思ったが、遠路約一キロ程を侵略する赤軍があった。

翌三日、朝七時宇登呂発、岩尾別に向う。岩尾別七時四十五分、登山にかかる。オホーツク展望、弥三吉水、極楽平を過ぎ、銀冷水から上は、雪渓で約一キロ程あり、羅臼平で正午になる。羅臼岳へはもう一息、国後島が一望の下に、南のノツト崎、泊山、羅臼山、爺々岳には、上部に雲がかかっているが、北のルルイ岬まで、約百キロの海岸線が見渡せる。また知床半島の山脈も天頂山、知西別岳、遠音別岳、海別岳、斜里岳。北には三つ峰サシルイ、オチカバケ、知円別岳、硫黄山、知床岳が一望でき、オホーツクの水平線まで潮が刷毛で引いた様であった。羅臼平では、北海道支部の野点が始まった。茶主は柳田さんと木下さん、一三〇〇米で、排毛氈に坐り、薄茶の味も又格別である。午後三時、漸く重い御腰を上げ、下山にかかる。お花畑から屏風岩下まで、高低差四百米、一・二軒の大雪山が圧巻である。

午後八時、羅臼温泉の二軒の宿は、山行参加者で賑やかに今日の

登山の話に花が咲く。知床の夜は白夜で、夜更けとも知らず、広場での語らいが続いていた。

愈々最終日、八時羅臼温泉を出発、標津、弟子屈、阿寒湖畔、池田町、帯広、日勝、千歳空港、午後八時札幌帰着。約一千二百キロのバスの長い旅は終りを告げ、名残り惜しみながら、皆各地へ旅立っていった。

(参加者) 山崎健、久保孝一郎、市吉明子、市吉惟浩、柳谷正義、蓬田時男、蓬田三枝子、森本市郎、佐藤正雄、河村章人、河村皆子、富田郁夫、織田沢美知子、柏原一公、高木基揚、牧野衛、高澤英雄、石原順次、遠藤恵太、松家晋、高橋功、庄司駒男、岡田幸生、熊谷正志、吉中登、佐々保雄、平野明、四手井靖彦、木下恵子、柴田初子、福田文二、福田光子、北林嘉鶴子、上野英世、安土武夫、安土しづ江、井関扶、柿花道子、水科行雄、笠原藤七、吉村健児、近藤信行、広羽清、砂田定夫、森川洋佑、斉藤桂、牧敏子、近藤緑、川北仁、山口一孝、内山脩一、小松原一郎、大野秀樹、荒野康子、亀井秀子、赤石喜恵子、柳田涼子、石井忠雅、加藤正己、久保田優一、大塚武、新妻徹、兼平治水、三浦勝幸、浅利欣吉、山川力、根岸祥一、大山幸太郎、秋野子弦、大森久雄、山本良三、梶原昭七、沢尻利弘、横田春雄、

今井三男、大山公子、大山祥輔、大山泰誠、大山みちる

(平野 明)

第四回丹水会例会

6月25日、26日

おりしも梅雨のまつ最中、今回は丹沢も大山の裏側にあたる、札掛は丹沢ホームの一棟を貸り切って開かれた。会の名称も従来の「小田急沿線の会」から昨年暮の例会で、堪酔にかけて丹水会に決ったという事で、なるほど集った面々は酒豪ぞろい。幅広い職業にまたがる仲間の輪がだんだん広がってゆくような印象をうけた。

翌日は、朝のうちパラパラと降ったが、コースは沢と尾根に分かれた。18対6で沢コースがだんぜん多く、特に年配の方のほとんどが沢コースに参加された。

ところがどろいことに、沢登り組が当然上流に歩き始めるべきなのに、下流に向ってスタコラ歩いてゆく。幹事の古谷さんがすぐ後出発点に行ってみると、誰もいないのにはびっくりしたそうだ。最初から幹事まかせののんびり山行、あとが思いやられるが、そこは皆足前の揃った面々、幽玄ただようモミの原生林の残るヤゲン沢を廻行し、少々落石にもどろいということなく、ものすごい藪こぎにもめげず、行者岳の裏側

にたどりついた。尾根組は丹沢ホームの横手から長尾尾根から塔ノ岳へ向った。沢組は行者岳で腹ごしらえ、木の又大日から丹沢ホームへ戻ろうという、若手の声をよそに、年配の方々のたつての要望で塔ノ岳まで足をのばす。新装なつた孫仏小屋で尾根組に合い、祝いのビールで喉をうるおす。

下りは尾根組の人達が辿った道を下ることになり、おりから出てきた霧の中のブナの樹林帯は、安堵感と情緒味が合重って、歩みを快いものとする。折井さんはしばし感激の言葉を発し、うっとりされている様子だった。

丹沢ホームに近くなったところで、霧が大粒となり、二〇分ばかり雨傘の世話になったが、梅雨の最中にしてはよい天気、気持ちのよい山行であった。

今回も世話役を引き受けて下さった古谷さん、どうも御苦労様でした。

(参加者) 折井健一、大森薫雄、近藤信行、近藤緑、鳥居亮、三栖寿生、石井貞雄、平柳一郎、鈴木正俊、滝沢芳章、小林碧、千葉保之、小林由美子、加藤比呂志、神戸恵子、堀井昌子、関喜義、重村清、高橋正雄、富永真生、川上光久、吉井洋之、神原忠夫、松田雄一、菅野時子、古谷聖司 (神戸 恵子)

『山日記』をこ愛用下さい

第七回山菜山行 守門岳登山

去る六月十一、十二日の両日、集會委員会主催、越後支部後援で、恒例の山菜山行が、守門岳登山をかねて行なわれた。此の催しは、第一回の浅草岳からかぞえて今回が七回だとか、年々盛大になってよるこばしい次第である。

十日は深夜の新宿を後にする。関越自動車道を利用して小出に出、入広瀬村公民館前には早朝の五時に着いた。既に朝まずみは過ぎていたのに、暗雲がたちこめ、入梅の気配さえみせていなかった。昨日までとは裏腹に、生憎の空模様であった。入広瀬村は物凄く変容ぶりである。近代建築が散見し、この村の富裕さが感じられた。それでも、緑濃い山々が暖く迎えてくれているようであった。会館では一同寝不足を休めた。

八時、篠突く雨をバスで二分(に)の集落に入り、そこから西川の奥の二岐を右に、登山口までは支部の人達の自家用車で送っていただく。そこで八八—M峰からの尾根に取りついたのは、九時であった。小さな道標があった。なしる九十名からの団体登山である。しかも降雨量は、ますます度を加えて激しい。急登なうえに、樹林の滑りやすい登山道を喘ぎながら行く。雨具を着ているので暑

から行く。雨具を着ているので暑くるしい。径幅の狭い瘦尾根を登るので、恐怖感をあたえない。しかし、さぞかし強風の日や、降雪の時は嫌な思いがするだろう。霧がまいてきて、中高地沢対岸の長峰方面も、山頂あたりも遠望がきかず、ひたすら冷たい雨の中を歩くだけである。間もなく登山道の左斜面が急激に落ち込んでいる雪溪に出る。なかなかの斜度だし、大きなベルクシュルンドが道に向って口を開けている。その先がガストンとなく不気味だった。かねてから、守門岳は名峰だ、と推賞されていたし、是非いつかは期待があったのだが、やはりその雄姿を望めないのは残念である。しかし、早々に切り揚げて下山される人達を送ってから、それでも山頂をめざす。鞍部に出ると、越後支部の方が笹団子を皆に配ってくれた。天恵の思いで空腹を満たした。雨にうたれて少々冷えてきた。二ツばかり池塘が配置されていた。晴れていれば、さぞかし素晴らしいだろうと思う。

頂上は一投足であった。土砂降りの中に、寂しげな二等三角点標を撫でて登頂の証とした。星食もそこそこ退散の憂き目にあい、このような山登りも久しぶりだな、と秘かに得心しながらの下山であった。いつか好天に恵まれて

気ごろの知れた仲間と、此の静寂の山稜で山岳展望を満喫するために、また訪れよう。三百六十度の視界をもつ山頂で、曇々たる山波の遙か彼方に曾遊の山をみつめて、古い日の様々な想い出を語りあうのは、本当に楽しいものだ。再訪に胸をふくらませて、皆の後を追った。下山は三時半頃であった。

それから、老人福祉センターで温泉にも勝る一風呂を味わい、汗も泥も快く流し、爽快な気分です。親会の一タを楽しむことができた。佐々会長の二十回も転倒しながらと言う今日の登山談、御挨拶があり、ついで入広瀬村村長の須佐昭三氏の歓迎の御挨拶をうけた。それから宴は酣むとなつて、越後の秘酒をはじめ、珍しい薬湯は疲労の体を快く恍惚とさせ、飛び入りの隠し芸が花をそえた。とりわけ、越後支部の佐藤俊氏扮する俄か神官のお抜いは、最初居ながら人達が神妙な面持ちで注視する中を、やけに落ちつきはらって始めるだけに、余計可笑しさをさそって人気を博した。もう一日早く祝詞を奏上していれば、今日の登山も好天であったものを、と惜しまれたものである。味つけも上々の山菜は、二十種にも及ぶ種類豊富な贅を極めるものであった。山菜料理はなんとと言っても、山里のその場所に限ると、感想をもらすのは本音である。

十二日は早朝から快晴に恵まれる。八時、越後支部の方々、松屋旅館の皆さんのお見送りを受けて車上の人となる。それから入広瀬村の山菜会館に立ち寄る。庭前の記念碑の「山菜賦」が眼にとまる。その詩からはこよなく雪国の人々を愛し、山菜に造詣の深い片岡博氏の人柄の片鱗をうかがい知ることが出来る。いかに此の村の人達が雪深い大自然の環境を重視し、これらの恵みに依存しながら、そのかわりあいの中で、どのように生きていこうとしているのか想像できた。

田子倉湖を半周するようなコースを行く。前毛猛を横目で見やりながら、美しい景観に湖面が輝き、初夏の緑が眼にしみた。残雪の浅草岳を垣間みる。皆さんは撮影に、眺望に、談笑に、余念のない様子であった。

さて、例年の行事とはいえ、集會委員会、ならびに越後支部の皆さんの労を多とするものであります。心づくしのお世話をいただきました。ありがとうございます。毎回皆さんのご好意に甘えながら、来年もまたより有意義で、実り多い山行ができますように、今から秘かに期待しているのは私だけでしょうか。また、片岡博氏の影武者の推進力に敬意を表するとともに、深く感謝申し上げます。

(参加者) 佐々保雄(会長)、阿部慎二、荒野康子、泉久恵、伊藤

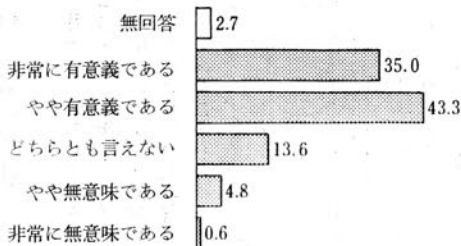
美恵子、井村桂子、入沢郁夫、入谷浩右、上野英世、上野操、内山脩一、大倉寛、大原富美子、岡本如矢、沖永裕、小野利次、片岡博、菅野時子、菅野弘章、神戸恵子、久保孝一郎、栗原敏起、小塩丘平、小林碧、佐藤淑男、重村清、柴田初子、柴田尚、清水春美、杉山敏、砂田定夫、関塚貞亨、高沢英雄、高沢佐恵子、高橋晋作、田尻良一、鳥居亮、長嶋正浩、名児耶達男、浜口欣一、原謙一、原田幹市、平井拓雄、平井吉夫、平柳一郎、広羽清、福久米之助、船木威志、堀井昌子、堀井潤子、松原明子、松久秀夫、松本熊次郎、宮城恭一、麦倉啓、村木康義、山口曉、山口一孝、山崎勝己、山崎健、山崎直人、山田靖子、吉田三智子、吉田実、吉田理一

△越後支部△佐藤一栄(支部長)五十嵐篤雄、内山武夫、大橋栄蔵、斎藤省吾、佐竹信幸、佐藤金一、佐藤俊、佐藤高志、諏訪武、高橋庄一、高橋久広、田中栄弘、早川英夫、古川文男、堀井浩、牧野牧夫、松本英一、室賀輝男、望月力、森谷周野、矢田目昇、山崎幸和

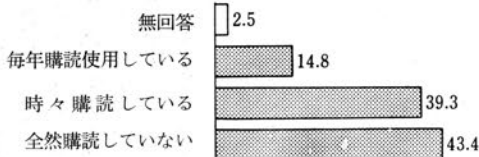
△集會委員会△秋元孝子、市川義輝、荻原賢司、小野寺優子、片岡泰彦、上飯屋正和、神山良雄、菅原広男、中川武、野沢正郎、若林幸子

(高沢 英雄)

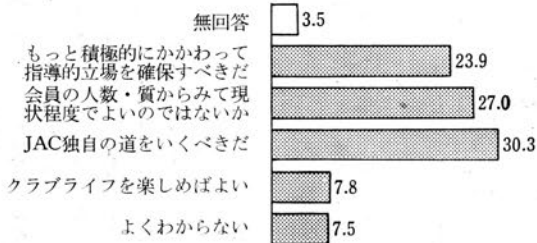
27 あなたにとって「山岳」はどういう価値をもっていますか？



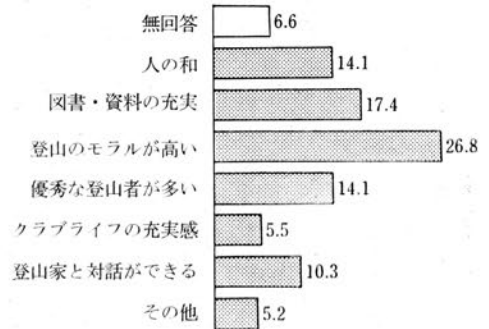
28 「山日記」を購読使用していますか？



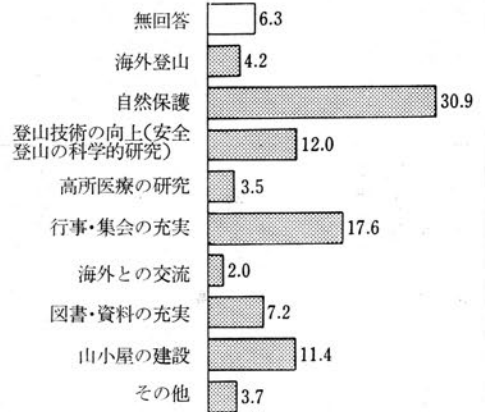
29 日本登山界全体の現状をみて、本会は今後どうかかわっていったらよいと思いますか？



30 日本山岳会のよい点を一つだけあげて下さい。



31 最後に、日本山岳会に活動を強化してほしい項目を、次のうちから答えて下さい。



お知らせ

☎ 234-6659

この電話でもお知らせしています

ビールパーティー

日時 九月二日(金)午後六時半
場所 日本山岳会 集会所
会費 一五〇〇円

主催 婦人懇談会

フリークライミング

技術講習会

ボルダリング・ハードフリークライミングに代表される最新の登山テクニクの指導講習

机上講習会

日時 九月十七日(土)午後二時
場所 日本山岳会 集会所

実技指導講習

日時 十月一日(土)―二日(日)

場所 奥秩父小川山周辺

宿泊 村宮金峰山荘別館

会費 五千元(保険、宿泊費、食糧費、雑費等を含む。交通費は別)

交通 小海線信濃川上駅下車、バス川端下下車、徒歩一時間、車の場合は、中央自動車道須玉IC―一四一号

定員 三十名程度

締切 九月十日

申込 事務局まで

主催 指導委員会

会員懇談会

パミールキャンプ報告

日時 九月二十九日(木)午後七時
場所 日本山岳会 集会所
会費 一五〇〇円

青年懇談会が登った83年のパミールの夏の報告を、ビールを飲みながら聞く会。

共催 青年懇談会

集会所 婦人懇談会

会津の山歩き

日時 十月一日(土)―二日(日)

場所 会津の山

詳細は下記へ

主催 婦人懇談会

図書交換会

日時 十月二十二日(土)午後二時

場所 日本山岳会 集会所

申込 図書委員会まで

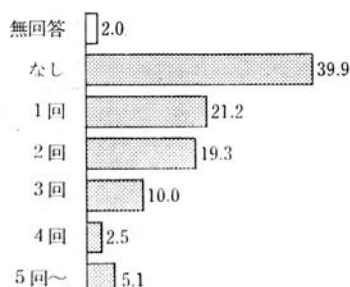
東京近郊で多数出品される場合は、委員会蔵に伺います。

地方の方は宅急便で九月末日までに送って下さい。希望価格をつけて頂きますが、一任の場合は委員会蔵で適価をつけます。売上げの二割を手数料として頂戴します。

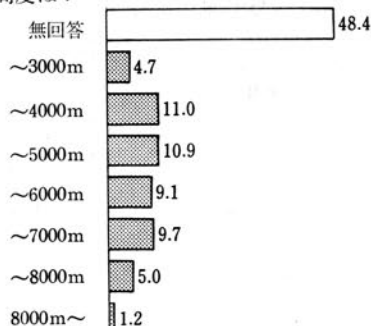
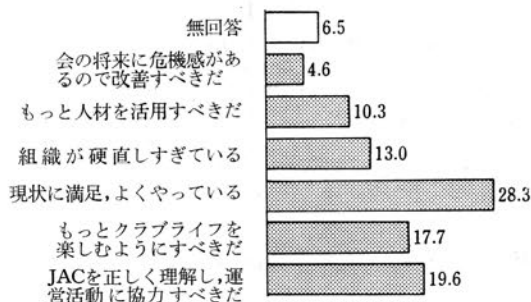
松方さんの提唱で始まったこの会も本年で十六回目です。例年通り本年も多数御出品下さるようお願いいたします。

主催 図書委員会

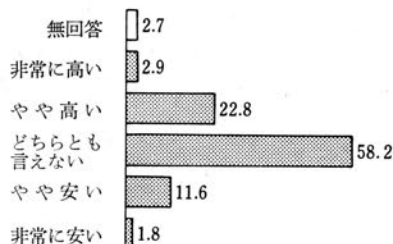
17 海外登山の経験はありますか？



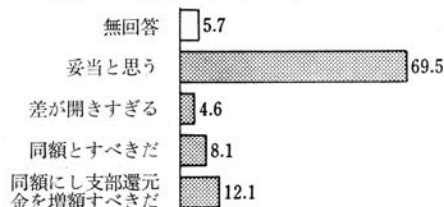
18 海外登山経験者は、次の質問に答えて下さい。あなたの登った最高高度は？


19 会員として本会の運営組織をどうお考えですか？
(最も強く感じられていることを一つだけ)


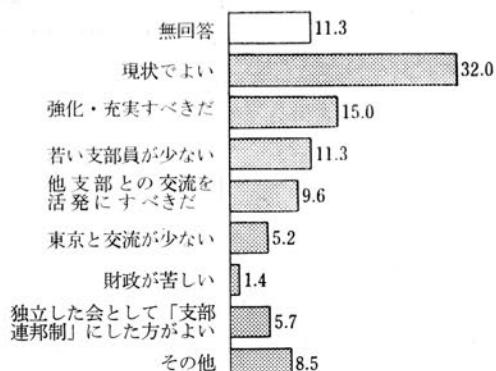
20 年会費をどう思いますか？



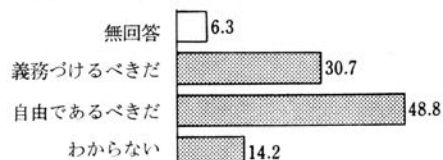
21 現在会費は、東京近郊在住者は年額8500円、地方在住者は6000円です(地方在住の支部会員は別に支部会費1000～1500円)。この差をどう考えますか？



22 現在の山岳会所属の支部は、小じんまりとしてまとまっているものから、活発に活動しているものまで、バラエティに富んでいます。支部の現状についてどのようにお考えですか？(必ず一つだけ)



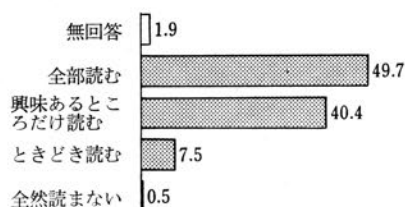
23 現在、会員の支部加入・未加入は自由です。支部役員は当該地方在住会員の支部加入の勧誘に苦勞しています。その点についてどう思いますか？



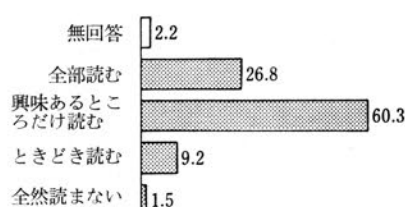
24 次期委員を引き受ける気がありますか？



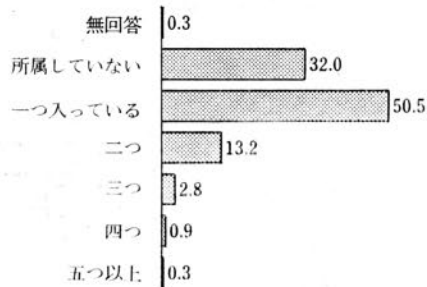
25 会報「山」を読んでいますか？



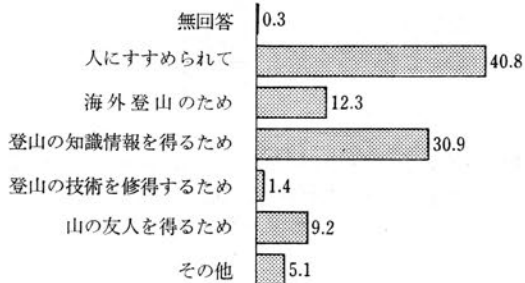
26 「山岳」を読んでいますか？



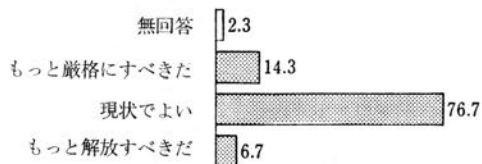
7 日本山岳会以外の山の会に所属していますか？



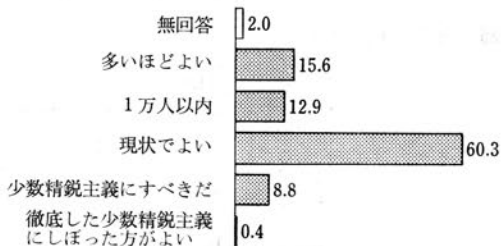
8 日本山岳会に入会した理由は？



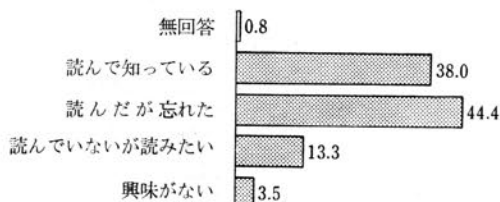
9 現在の入会方法をどう思いますか？



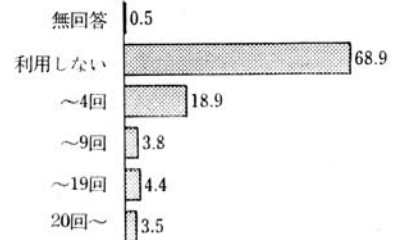
10 いま会員の実数は 3800 人から 3900 人の間です。現在の日本の登山界における本会の立場から見て、この会員数をどう思いますか？



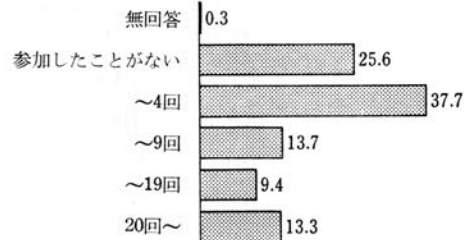
11 日本山岳会の定款第 2 章「目的および事業」を読んだことがありますか？



12 会室を 1 年間にどの程度利用しますか？



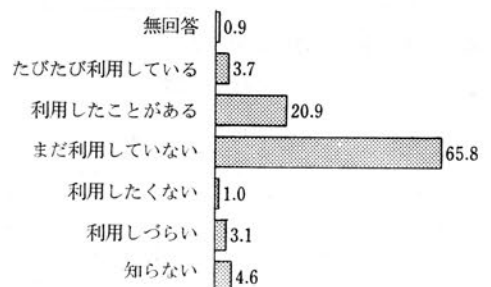
13 これまでに集会、その他の活動（支部行事も含む）にどの程度参加しましたか？



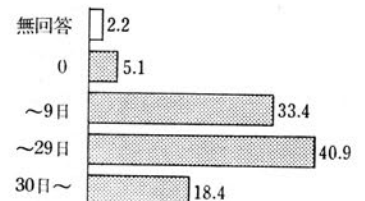
14 図書室を利用したことがありますか？



15 上高地の山岳研究所(山研)を知っていますか？



16 年間どのくらい山に行きますか？（過去 5 年平均）



アンケート調査報告

アンケート調査特別委員会

全会員を対象としてアンケート調査を行なうことによって、日本山岳会の現状を正しく把握し、今後の会運営の資料とするため、去る二月の理事会の決議により、アンケート調査特別委員会が設置された。

本委員会は、この計画を実施するため、3月9日より10数回の会合を開いて作業を行なったが、このほどその調査結果がほぼまとまったので、とりあえずその集計結果のみを報告することにする。

この種のアンケート調査は、過去一回、昭和47年に集会委員会によって行なわれただけであるが、今回は前回を上回る規模をもって実施し、設問数31、総発送数は3900通となった。集計は従前の手作業にかわって、コンピューターが使用された。

回答率は、前回32%（発送数2364、回答数766通）

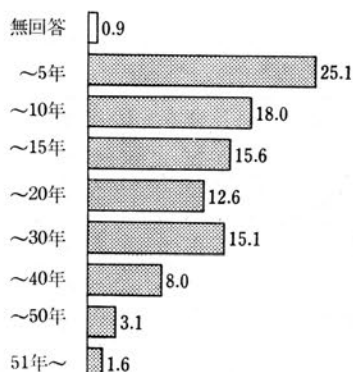
であったのに対し、今回は45%（発送数3900、回答数1755通）という高率に達した。これは会員のほぼ半数にあたるが、アンケートの回答率としては高い方で、この調査結果は、日本山岳会の実体、会員の意識をかなり広く反映したものと考えてよいであろう。

最後に今回の調査に対して寄せられた会員のご支援、ご協力に対し、厚く感謝の意を表する。

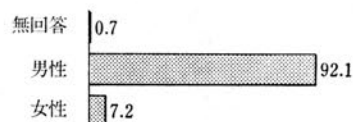
委員長 小倉 厚
委員 神崎 忠男 西村 政晃
高遠 宏 関塚 貞亨
三辺 夏雄 市村 洋子
三沢 幸夫 相馬 勉
大峰 芳枝
特別協力 小野寺優子

1 在籍年数

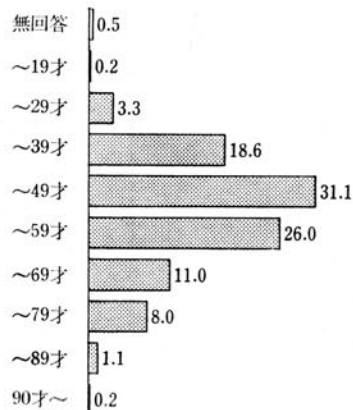
(数字は%)



2 性別



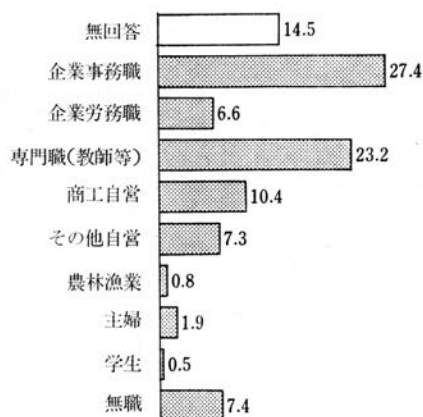
3 満年齢（4月1日現在）



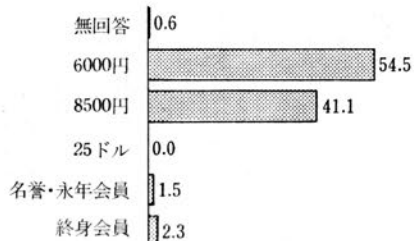
4 住所



5 職業



6 年会費はどちらですか？



新旧役員懇親会

富士山麓、富士ハイッ

六月十八日(土)十九日(日)の両日、静岡県富士市郊外の富士ハイッで、新旧役員懇親会が開かれた。二年に一度の恒例の会だが、泊まりがけの懇親会は久しぶりのことという。参加者は佐々会長、田口、山田副会長、渡辺前副会長ら二十八人。晴れていれば北に雄大な富士、南に駿河湾を見下ろす絶好の高原だが、二日間とも曇っていたのは残念。

それでも長老、若手が入り交って新旧の役員が酒を汲みかわし、JACの将来、山登り、あるいは人生について：など、夜明け近くまで語りあかした。会の将来にとって、新しい役員にとって得るところが多い二日間だったと思う。遠い熊本から参加された西沢支部長(評議員)は「懐かしい人、新しい人にお逢いできるのが楽しいから来る。遠いのは苦にならない」という。懇親会を準備した者には嬉しい言葉だ。

会報五月号(四五五号)に山日記担当だった小倉厚前理事が「四年間のボランティア」と題する随想を寄せたが、JACの役員をされた方には大なり小なり同じようなご苦労を

かけている。副会長を退任された渡辺さんをはじめ、旧役員の方には引き続きいて評議員、理事などの役員をお願いした方もいるが、いづれにしても四年間ご苦勞様でした。また何かとお心遣いとお世話をいただいた山本静岡支部長、富士市在住の久保田さんには心からお礼を申し上げます。

副会長、渡辺兵力、河野幾雄、佐藤テル、岡沢祐吉、松丸秀夫、中村純二、鴨原啓佑、西沢健一、山本朋三郎、神崎忠男、大倉昌身、田村俊介、小倉茂輝、松田雄一、皆川完一、高遠宏、平井吉夫、平野隆司、村木富士、久保田保雄、菅原広男、関塚貞亨、板倉健二、藤井正彦、大峰芝枝

会務報告

6月

理事会

6月13日 午後6時30分

本会ルーム

出席者

佐々会長、田口、山田副会長、田村、神崎、大倉、赤松、松家、水野、平野、長谷川、平井、村木、皆川、梅野、高遠各理事、小倉、松田監事、宮下、鴨原、山口、中村各評議員

委任・欠席

西村、河村、鈴木、絹川各理事、飯野評議員

会長挨拶

▽新役員を迎え、新たな気持ちで会務を行ないたい。

▽アンケートの結果をよく汲みとって問題点を検討したい。

▽二年後、創立八〇周年を迎えるのでその準備に力を入れたい

報告事項

(関塚 貞亨)

▽エベレスト地形図の貸出について。

▽牧野文子会員が六月八日に死去された。

▽会歌を制定したらどうかという意見が出ている。

▽ネパール観光大臣が近く来日する。

▽各支部より総会報告が届いている。

審議事項

▽休会会員の会員復活については、内規に従って処理する。

▽アンケート調査の報告は、集計結果の数字だけでも、なるべく早く会報に出すことにする。

▽担当理事を確認し、新任理事挨拶。

▽八〇周年準備会は、担当理事とは別に近く発足させる。

▽カンチェンジュンガ登山計画についての説明をうけ、その進め方について意見を交換。早急に日本山岳会の態度を決めることにする。

・ルーム誌

6月

2日(木) 海外委員会
7日(火) カンチエ懇親会

9日(木) 婦人懇談会

13日(月) 学生部集会

15日(水) 理事会

20日(月) 三水会

21日(火) 図書委員会

24日(金) 婦人懇談会

25日(土) 科学研究委員会

29日(水) 講演会

25日(土) フィルム映写会

29日(水) 自然保護委員会

今月の来室者517名

会員移動

物故
五五五二 皆川 文弥(6・6)

二一 辻村 太郎(7・15)

終身会員
四〇三四 入沢 郁夫

支部変更
五〇二七 照内 豊(静岡)

八〇三六 宮崎 幸博(信濃)

八四二一 内藤 秀樹(東海)

八三一四 宮崎克之助(北海)

六六七七 町 俊一(静岡)

退会

九一七四 板垣 望

七九四二 日本ヒンズークシエ

・カラコルム研究会

七〇九八 小椋 利雄

編集手帖

▼アンケート調査報告
によると、この「山」を
全部読む会員が四九・
七％、興味あるところ
だけ読むが四〇・四％
だったという(11頁)。

▼「山」に対する関心が
これだけ高いというこ
とは、会報が果たしている役割の
重要さを如実に示すものである。
編集者の責任もまた重大と、改め
て痛感している。

▼このところ、「山」は数字の多い
号が続いているが、次の数字もご
覧頂きたい。

年度	会号	最終
47	7546	7718
48	7718	7928
49	7928	8080
50	8080	8233
51	8233	8374
52	8374	8524
53	8524	8703
54	8703	8889
55	8889	9082
56	9082	9279
57	9279	

▼これは、過去十年間の新入会員の
数を調査したものであるが、今
後もこの延び率で行くとすれば、
会員番号一〇〇〇番は、昭和六
十一年(創立八一周年)の夏か秋
の頃になるであろう。この記念す
べき会員章は、一体誰の胸に輝く
のであろうか。

昭和五十八年八月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五十一

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 佐々保雄

編集代表 皆川完一

電話東京(郊外)四四三三

振替口座東京三三九二九番

印刷所 株式会社 技報堂